

琉球大学学術リポジトリ

東アジア南方沿海地域の先史考古学

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム 公開日: 2021-04-12 キーワード (Ja): 東アジア南方沿海地域, 東南中国, 好川文化, 農耕社会, 貝塚社会 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, Goto, Msahiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48067

東アジア南方沿海地域の先史考古学

後藤 雅彦

Prehistoric Archeology in the Southern Coastal Area of East Asia

Mshahiko GOTO

要旨

東アジアにおいて、各地で新石器文化が形成された際、東南中国から台湾、そして琉球列島を含む東アジア南方沿海地域では貝塚形成がはじまる。一方、長江中・下流域を源とする稲作文化が分断された地域的文化的特徴とする東南中国・台湾に波及する。東南中国では内陸地域の広東石峡文化（東南中国稲作農耕社会）と沿海地域の曇石山文化を代表とする東南中国貝塚社会に大別することができる。本稿では、東南中国の北に隣接する浙江南部の好川文化について副葬武器類と耕作具を分析する。それをふまえて、東アジア南方沿海地域の先史考古学の視点として、農耕社会（内陸性）と貝塚社会（沿海性）の比較に関して検討する。

キーワード：東アジア南方沿海地域、東南中国、好川文化、農耕社会、貝塚社会

はじめに

筆者は、東アジア南方沿海地域⁽¹⁾における先史考古学について、次の2点の研究課題が重視し、研究を続けている（第1図）。

第一に、初期新石器文化の形成に関わる点では、従来の年代観では台湾の長浜文化を代表として6000～5000年前まで継続し、その後、長浜文化とは異なる文化として縄蓆文土器、すなわち台湾では大盆坑文化が出現したとされていた。その為、長浜文化の終焉と初期新石器文化の成立の関わりについて、その年代的な位置付けの検討が必要である。

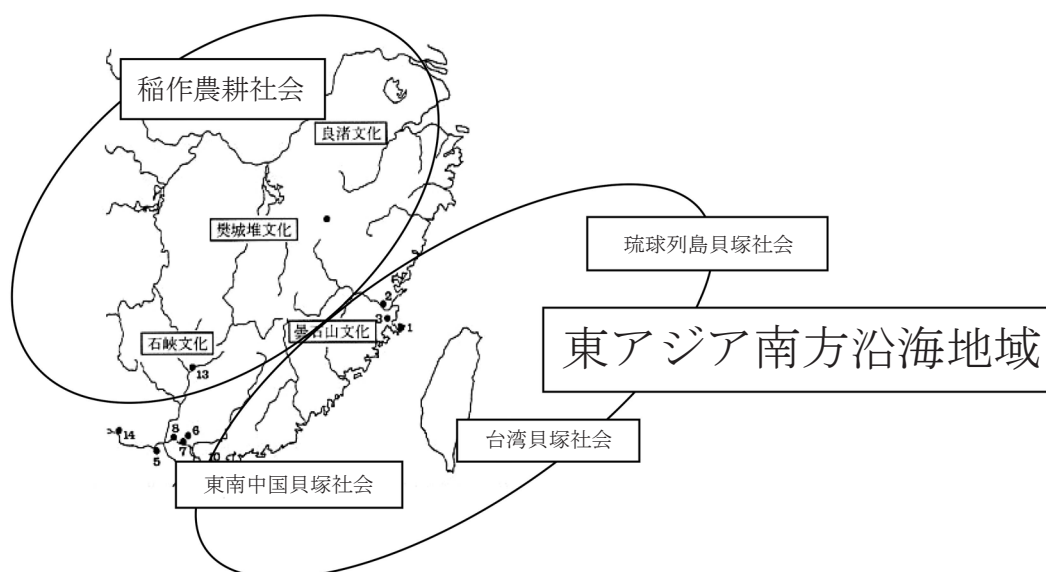
そうした中、8000年前とされる亮島島尾遺跡の事例は、中国東南沿海地域から台湾にかけての初期新石器文化の成立を探るうえで重要な成果となる。最近、金門島の金亀山遺跡を含めて7000年前より古い可能性のある段階として「前大盆坑文化期」も設定されている（洪2013）。同時期、長江下流域においても跨湖橋文化が確認され、水辺の資源に依存する多角経済が想定されており（中村2009）、東南中国の初期新石器文化の成立について、長江下流域を含む周辺地域が如何に関与していたかが問われる。東南中国も、沿海地域を含むことから海洋適応の進行が考えられるが、安定した新石器文化の形成には、植物利用の重要性も指摘できる（後藤2018）。但し、居住形態の変遷など、各地の新石器文化の形成過程について、詳細は明らかでないのが現状であろう。

第二に、福建・広東を中心にした東南中国は、新石器時代以来、稲作の先進地帯である長江流域の南に位置し、野生イネの生息範囲内ながら、考古学的に本格的な稲作技術は長江下流域からの影響が認められる（後藤2011・2012 a）。そして、東南中国の新石器後期文化は、長江下

流域の稲作農耕社会⁽²⁾と共通する要素の強い内陸地域の広東石峡文化（東南中国稲作農耕社会）と沿海地域において、貝塚を伴い狩猟漁撈採集が重要な生業を占めていた東南中国貝塚社会に大別できる。

すなわち、東南中国の新石器文化は、狩猟採集社会から農耕社会への一連の変遷では捉えられない変遷過程をもつことから、貝塚形成が地域社会の諸活動の中でどのような位置付けになるのか、その問いに迫るためにあえて貝塚社会という用語を用いることにする。

そこで、本稿では主にこの第二の問題に関わる点として、東南中国の北に隣接する浙江南部の事例をふまえて、農耕社会と貝塚社会の対比を試み、合わせて東アジア南方沿海地域の先史考古学研究的課題を整理したい。



第1図 東アジア南方沿海地域と稲作農耕社会

1、東南中国の新石器文化の特徴は何か

筆者はこれまでも、東南中国の先史文化の特徴を長江下流域との比較を通じて行っているが、とくに、『中国通史第2巻遠古時代』の中での嚴文明(1994)の指摘を重視している(後藤 2012 b)。すなわち、中国東南部と華南の地理的環境として、第一に海岸線が長く多くの島嶼を含むこと、第二に丘陵が多く、平原が少ないことである。そして、第一により海洋文化の発展(貝塚形成)、第二により分断された地域文化の並存がみられる。

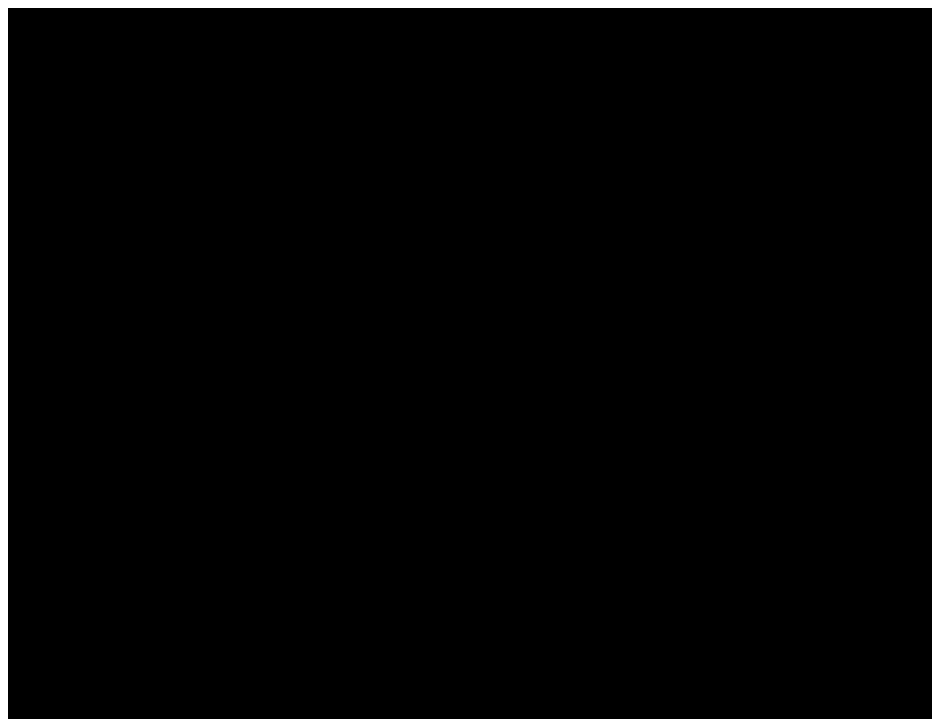
このように分断された地域文化をもつ東南中国の先史文化の理解にあたって、沿海地域と内陸地域の違いに着目することが必要である。拙稿(2018)においても、沿海地域の新石器文の形成にあたって、内陸地域との比較を試みているが、内陸地域では福建の奇和洞遺跡(範雪春主編 2015)のように更新世から完新世への移行を考古文化の変遷として捉えることができる。

そして、各地で新石器文化成立後、長江流域から南に広がる文化交流の強弱は、より東南中国の沿海地域と内陸地域の差異を顕在化させることになる。さらに、沿海地域において、閩江下流域と珠江三角州は、鼎が導入されても定着しないという沿海地域に共通する点がありながらも、長江下流域からの稲作農耕に関わる要素の導入についての差異がみられるなど地域間の差異も認

められる。この点に着目するならば、分断された地域文化の再構成にあたって、遺跡間の差異や地域内の差異を確認していくことが重要であるとする⁽³⁾。

BC 7000	跨湖橋				西樵山細石器 東灣 I 期
6000	河姆渡				
5000	馬家浜				
4000	崧沢		前石峡	穀垵頭	金蘭寺下層 大灣 後沙灣 草堂灣
3000	良渚	好川	石峡 石峡墓葬 ①~③	曇石山下層 曇石山中層	銀洲①湧浪
2000	馬橋		石峡墓葬④ 石峡中層	曇石山上層 黄土崙 後門賽	銀洲②・竈崗 金蘭寺中層
1000	湖熟		石峡上層		銀洲③・茅野 東澳灣 亞婆灣 鷄山
	長江下流域	浙江南部	西江流域	閩江下流域	珠江三角洲

第 1 表 東南中国の時期区分



2、好川文化

東南中国に北に隣接する浙江省について、研究史を振り返ると、1950 年代後半に浙江内における生業形態の差異として北の平野部における農耕社会と南の丘陵地における狩猟採集段階とい

う対比がなされていた（浙江省博物館他 1958）。浙江南部は、東南中国の地理的環境に共通する点がみられるが、農耕と狩猟・採集という視点ばかりでなく、農耕の生業の中で占める割合が問われるのである。

2017年に好川遺跡の発掘20周年を記念して『好川文化集萃』（王海明主編 2017）が刊行された。遂昌県好川遺跡は1997年に発掘調査が実施され、80基の墓葬について2001年に詳細な報告書が刊行された（浙江省文物考古研究所他 2001）。

同墓地の出土土器群について3つ、A群（良渚系の影響が認められる）、B群（在地の展開を示す土器群）、C群（印紋陶系で曇石山文化からの影響が認められる）の3組に区分されている。浙江南部の中の一つの地域的文化である好川文化であるが、周辺地域と孤立していたわけではなく、地域間交流の中で地域的文化が形成されていたのである。好川遺跡の報告書では、周辺地域との文化関係が1章設けて検討されているように、その空間的位置関係として、長江流域から東南中国へ広がる地域間関係が重要な意味をなす。

一方、その位置関係が平原に対し、山地にあることから、稲作農耕を基盤とする浙江北部の平原地域とは異なる地域文化を想定している。墓葬副葬品の傾向として、東南中国の農耕社会と貝塚社会、どちらと共通性が認められるのであろうか。

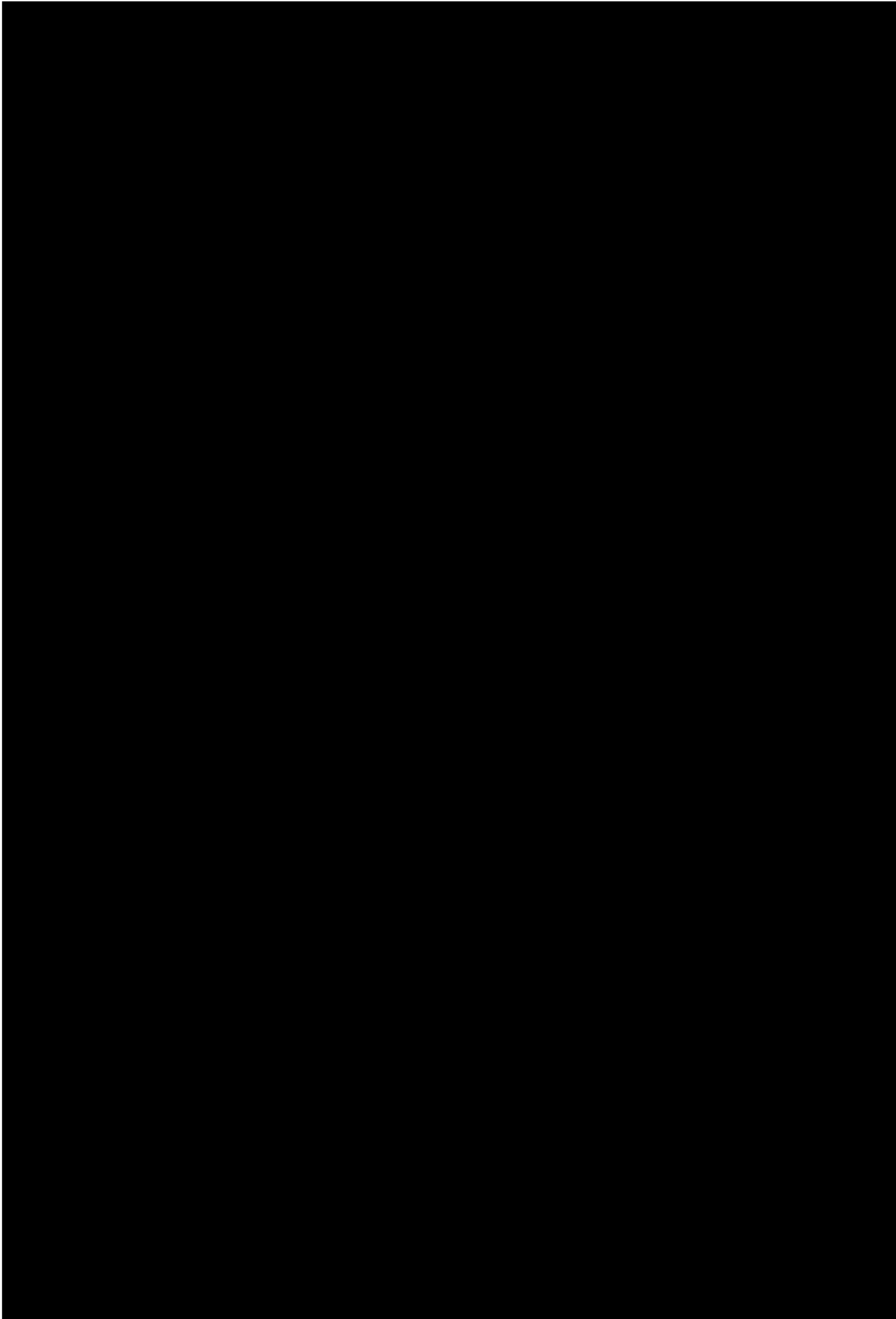
ここで、好川遺跡の副葬品としての石鏃に注目してみたい。好川遺跡の80基の墓葬では、副葬品1028点の内27基（全墓数の33%）に総数95点（全副葬品数の9%）の石鏃が副葬されており、27基のうち15基（56%）では石鏃または玉鏃を伴っている。なお、好川遺跡では、土製紡錘車が副葬されている墓葬（80基のうち8基）では石鏃を伴う事例がないことは、副葬品に性差があることを示していると判断できる（第3図、第2表）。

こうした状況は、東南中国でも稲作農耕社会の石峽遺跡（広東省文物考古研究所他 2014）と共通する（後藤 2019）。出土遺物をみると、副葬遺物（人工品）総数2,294点の内、石鏃は649点、約28%を占めるほど高比率である。墓数102基の内、37基に石鏃が副葬されている（約36%）。さらに玉・石鏃とともに副葬される例が17例（46%）ある。石鏃は多様な形態があるが、基部近くがそぎ落とされた報告書でのA型が多く（503点）、玉・石鏃と伴出する事例、すべてにこのA型が含まれている。A型は良渚文化でも多く、玉・石鏃とともに長江下流域からもたらされた外来品の武器と想定される。長江下流域では、農耕社会形成後に戦争の考古学的痕跡（武器類ほか）が顕著になる。武器と推定される石鏃は儀器として玉製品も製作され、副葬品となっている点は重要である。

一方、沿海地域の貝塚社会では、曇石山遺跡の第8次調査の成果を例にすると（福建省博物院 2004）、副葬遺物総数311点の内、石鏃は4点、約1%にすぎない。墓数にしても、42基の内1基のみの副葬である点は、石峽遺跡と比べて極めて対照的な状況を示す。同調査の範囲内では、鏃と一緒に副葬される事例もみられない。

農耕社会の形成にあたって、集約的農耕の定着によって武力を誇示する社会とそうではない社会が存在していたと考えられ、東南中国の新石器文化の成熟度の差異は、武力の誇示を示す考古学資料の多寡が重要な指標となり、東南中国沿海地域をとり囲む内陸地域（浙江南部を含む）においては稲作農耕社会が形成されていたと考えられる。

一方、耕作具と推定される石器はどうであろうか。浙江南部の沖積平野に位置する白石楊柳灘遺跡では、良渚文化の特徴の一つである石製耕作具（破土器）が、他の良渚系石器（有孔石斧・有段石斧）と共伴して出土したことは注目される（徐、金 1992）。

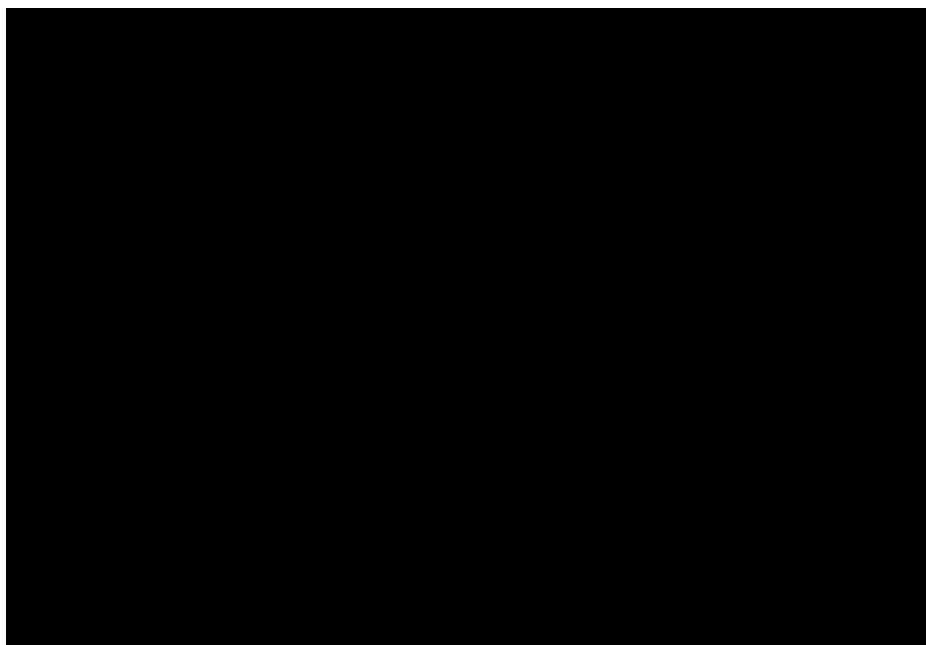


墓番号	総数	石鏃	鉞	備考	時期	墓番号	総数	石鏃	鉞	備考	時期
5	7	0	0		1	14	23	5	石1	印紋陶	3後
6	7	0	0		1	18	26	0	0	印紋陶・土製紡錘車	3後
8	17	4	0		1	37	13	0	0		3後
15	13	2	0		1	38	13	0	0		3後
16	7	0	0		1	41	9	0	0	土製紡錘車	3後
19	6	0	0		1	46	14	2	0		3後
24	3	0	0		1	51	24	2	石1	玉刀1、印紋陶	3後
25	2	0	0		1	54	11	0	0	土製紡錘車	3後
35	3	0	0		1	57	14	3	玉1		3後
39	7	0	0		1	59	16	3		印紋陶	3後
40	10	0	0		1	67	6	0	0		3後
42	9	1	0		1	70	13	0	0	玉玦2	3後
45	5	0	0		1	4	36	0	0	印紋陶	4前
80	4	0	0		1	31	17	0	0	印紋陶・土製紡錘車	4前
7	26	2	0		2	43	7	0	0		4前
11	12	0	0	不完全	2	52	18	4	0	印紋陶	4前
26	10	0	0		2	53	21	2	石1	印紋陶	4前
32	12	0	0		2	56	12	1	玉1	印紋陶	4前
34	8	0	0		2	61	6	0	0		4前
36	8	0	0		2	62	38	11	玉1		4前
68	6	0	0		2	63	19	0	0	印紋陶	4前
69	6	0	0	印紋陶	2	64	17	0	0	印紋陶・土製紡錘車	4前
1	24	4	石1		3前	65	25	8	0	印紋陶	4前
2	19	4	0		3前	72	16	4	石1		4前
3	17	0	0		3前	76	7	0	0	印紋陶	4前
9	14	0	0		3前	77	4	0	0		4前
10	30	0	0		3前	78	4	0	0	印紋陶	4前
12	35	3	玉1	印紋陶	3前	21	9	0	0		4後
20	12	0	0	土製紡錘車	3前	29	33	13	玉2	三孔石刀	4後
27	12	0	0		3前	49	19	1	石I	印紋陶	4後
33	8	3	石1		3前	60	27	0	0	印紋陶・土製紡錘車	4後
44	14	0	0		3前	13	8	3	石1		5
47	13	3	石1	印紋陶	3前	17	12	0	0	印紋陶	5
48	16	0	0		3前	28	10	0	0	印紋陶	5
50	9	0	0		3前	30	6	0	玉1		5
55	15	0	0		3前	58	18	4	石1	印紋陶	5
66	15	0	0	土製紡錘車	3前	71	11	0	石1	印紋陶	5
73	13	0	0		3前	22	3	1	0		不明
74	9	1	0		3前	23	2	1	0		不明
79	8	0	0		3前	75	2	0	0		不明

第2表 好川遺跡墓葬副葬品一覽（石鏃他）

沿海地域では時代が下るが、玉環島の三合潭遺跡からは、印紋硬陶や灰釉陶器と共に石器（犁、石斧など）や青銅器（斧、鏃、釣針など）が出土している。農耕具では石犁、青銅鏃、漁撈具では青銅製釣針、土製漁網錘がみられる（玉環市文化広電新聞出版局編 2017）。

丘陵・山地においては、久山湖遺跡（張 2006）を例にすると、有段石斧や石鏃以外に石鎌が出土しているが（第 4 図）、石製耕作具はみられない。また、好川文化の集落遺跡（墓葬 35 基も含む）である温州曹湾山遺跡でも石鏃と片刃石斧が主体のようである（王海明主編 2017）。



浙江南部の複雑な地形は、農耕という面からすると耕作具・土掘具に顕著な地域性がうかがえる⁽⁴⁾。これは東南中国と共通する傾向といえる。筆者は、東南中国及びその周辺における石製耕作具について、長江下流域と比較しながら検討したことがある（後藤 2000）。内陸地域の農耕社会でも江西樊城堆文化及び石峽文化では有孔石斧と有段石斧を共有する地域であるが、良渚系耕作具である破土具・耕田器などは欠落し、同地域特有の石鏃が出土している。石鏃は形態的には片刃石斧に類似するが、側面形が弧状を呈することを特徴とし、一般的に大型で石鋤と同様な用途が想定される。

3、東アジア南方沿海地域の新石器文化の比較に向けて

東南中国から台湾への中国稲作文化の南周りの拡散は、長江下流域から北周りで朝鮮半島そして日本列島は拡散する北回りの拡散と対比することによって、東アジアから東南アジアという広大な地域の中での稲作文化・社会の成立を比較することができると考える。

東南中国では、同一地域内でより長江下流域からの影響が大きい東南中国稲作農耕社会（内陸性）と沿海地域の東南中国貝塚社会（沿海性）を対比することができ、多様な新石器文化を比較する上でも重要である。

東南中国に北に隣接する浙江南部は、好川文化を代表として、長江下流域からの影響を主体としながらも、東南中国との関係も持ち合わせ、地域性豊かな文化を形成する。平原の稲作農耕地域とは異なる生業基盤が想定されるが、武器類の副葬事例から社会的な状況は、東南中国内陸地

域に展開した農耕社会に近く、長江下流域で展開した農耕社会の社会状況が反映されたと考えられるのではないか。

こうした生業形態の多様性は、佐々木高明（1997）の想定する「越的な世界」に通じるものがあるように考える⁽⁵⁾。佐々木は、紀元前 2000 年紀後半から紀元前 1000 年紀の初めに長江下流域から中国東南沿岸地域に「越的な世界」が成立したと指摘し、水田稲作農耕とともに、江南の山地では焼畑民が、海岸部には潜水漁撈を営む漁撈民が生活しており、こうした諸要素が複合した「越的な世界」が形成されたとする。この指摘をうけて、西江清高（1995）が「中国東南部の考古学文化の分布を考えると、実は平面的な広がりに加えて、沿岸、平野、山地といった垂直分布」にも注意を促した点は看過できない。本稿では空間的な位置関係の違いから、沿海地域と内陸地域に大別したが、生業形態から生活様式における特徴としての「沿海性」と「内陸性」の対比が重要である⁽⁶⁾。

まとめ

このように「越的な世界」と称される多様な東南中国の先史文化の動向を整理してみると、広く東アジア南方沿海地域に共通した傾向を読み取ることができる。すなわち、分断された地域的文化的特徴としながらも、それは地域的文化的文化が孤立していたというわけではなく、むしろ、活発な地域間交流がうかがえる。

そうした地域間交流の一つに長江下流域からの稲作文化の流れがある。東南中国では、長江下流域から東南中国内陸地域（内陸性）への稲作農耕社会の影響が確認できる一方、それとは好対照な形で、東南中国沿海地域（沿海性）の貝塚社会の存在が浮かびあがってくる。そして、対岸の台湾では稲作農耕が導入されても、地域によっては貝塚形成が継続する。さらに、琉球列島の先史文化研究において、日本本土の稲作農耕文化（弥生文化）との交流を明らかにする過程で、なぜ、農耕が導入・定着されなかったのか問われている。

すなわち、東アジア南方沿海地域では、稲作の拡散の波及と定着が段階的に進行する場合とそうでない場合、稲作農耕民と接触して文化交流が行われていても稲作は導入されない、あるいは導入しても自然環境の作用により定着しなかった可能性もあろう。そうした地域的受容のあり方の多様性が東アジア南方沿海地域の先史文化の特徴といえる。

本稿では、長江下流域を起点とする稲作文化、稲作社会の影響を東南中国の事例から検討したが、そもそも新石器時代の始まりについて、更新世から完新世への移行の中で各地の状況を比較することが今後の研究課題の一つにあげておきたい。その際にも前述した「沿海性」と「内陸性」の対比が重要となってくると考える。そして、各地域の新石器文化の形成過程の中で、定住化から農耕社会の成立までの推移を比較することが必要であろう。

注

1、当初、琉球列島から台湾、そして東南中国を囲む広い沿海地域について、東アジア亜熱帯沿海地域という地理的範囲を設定していた（琉球列島と台湾の比較については東アジア亜熱帯島嶼域と設定、後藤 2018）。地域性を強調する上で有効であると考えたが、亜熱帯という気候帯については十分検証できるものでないため、本研究では、中国大陸および日本列島に対し、南方に位置する沿海地域として、東アジア南方沿海地域を設定する。

なお、2020 年度琉球大学科研費等獲得インセンティブ経費の交付をうけ、「東アジア南方沿海

地域における貝塚と稲作に関する総合的比較研究」に着手している。

2、中村（2009）は、長江流域におけるイネ利用の時間経過による強化の過程を捉え、長江下流域の考古学文化の変遷としては、紀元前 5000 年紀後半の河姆渡・馬家浜文化後期に「稲作文化」の形成、紀元 4000 年紀前半の崧沢文化中期に「稲作社会」の成立、そして紀元前 4000 年期末の良渚文化前期に「稲作文明」の誕生を認めている。

3、閩江下流域においても、2011～2015 年に「閩江下游流域史前遺址考古調査與研究」が実施されている（福建省曇石山遺址博物館 2018）

4、浙江省南部の飛雲江流域の遺跡（浙江省文物考古研究所他 1999）において、台湾各地で出土する打製石刀に類似するものが確認されており、石刀のすべてが収穫具であったかどうかは検討しなくてはならないが、台湾との共通性が長江下流域と福建省の中間地域にも認められることになる。

5、歴史学・民族学の分野でも古代越族の研究に高い関心が寄せられており、1980 年には百越民族史学術討論会が厦門大学で開かれている。考古学の立場からは、印紋陶や有段・有肩石斧を中心に、新石器時代から各地域の文化系統が論じられている。

6、紀元前 2000 年以降の福建の先史文化について、楊琮（1997）は「沿海類型」と「内陸類型」に区分している。その後、紀元前 2000 年以降の印紋陶が各地で盛行する中、沿海地域と内陸地域を覆う広範囲での文化的共通性、すなわち「越的な世界」が生まれるが、こうした動向も、東アジア世界という広い世界での位置付けが必要である。

引用文献

王海明主編 2017『好川文化集萃』文物出版社

広東省文物考古研究所他 2014『石峽遺址— 1973～1978 考古発掘報告上』文物出版社

玉環市文化広電新聞出版局編 2017『海島珍遺—玉環三合潭遺址出土文物図文鑑』西令印社出版

嚴文明 1994「周辺地区的遠古文化」『中国通史第 2 卷』上海人民出版社

洪曉純 2013「從中国東南沿海到太平洋—由考古学新看南島語族史前史」『東亞考古的新發現』中央研究院

後藤雅彦 2000「東南中国の先史文化と周辺」『琉球・東アジアの人と文化』下巻

後藤雅彦 2011「先史東南中国における稲作農耕の再検討」『地理歴史人類学論集』2

後藤雅彦 2012 a「東アジアの稲作の拡散と人の移動」『東アジアの間地方交流の過去と現在— 済州と沖縄・奄美を中心にして—』彩流社

後藤雅彦（盧柔君訳） 2012 b「中国東南史前文化及其交流」『考古学研究』9 上

後藤雅彦 2018「東南中国沿海地域の新石器文化」『地理歴史人類学論集』8

後藤雅彦 2019「先史東アジア農耕社会における集団間闘争—東南中国の場合」『生物化学』70-3

佐々木高明 1997『日本文化の多重構造—アジア的視野から日本文化を再考する』小学館

徐定水、金福来 1992「浙江樂清古文化遺址発掘簡報」『考古』1992-9

浙江省文物考古研究所 2001『好川墓地』文物出版社

浙江省文物考古研究所他 1999「浙南飛雲江流域青銅時代文化遺存」『東南考古研究』2 輯

浙江省文物考古研究所他 2017『好川文化集萃』文物出版社

浙江省博物館他 1958「浙江新石器時代文物図録」浙江人民出版社

秦順県文博館 1993「浙江省飛雲江上遊古文化遺址調査」『考古』1993-7

- 張玉蘭 2006 「浙江建德市久山湖新石器時代遺址的發掘」『考古』 2006-5
- 中村慎一 2009 「中国長江流域の稲作文明と弥生文化」『弥生時代の考古学Ⅰ 弥生文化の輪郭』
同成社
- 西江清高 1995 「印紋陶の時代の中国東南部」『日中文化研究』 7
- 範雪春主編 2015 『漳平奇和洞遺址図鑑』 科学出版社
- 福建省博物院 2004 『閩侯曇石山遺址第八次發掘報告』 科学出版社
- 福建省曇石山遺址博物館 2018 『閩江下游流域史前遺址考古調查與研究』 科学出版社
- 楊琮 1997 『閩越国文化』 福建人民出版社